

目次

凡例

寄稿 「善光寺信仰」の寄贈品について	佐々木茂美	3
作品解説 阿弥陀三尊像（善光寺式）		5
図版		
A 善光寺如来関係		7
B 戸隠神社関係		37
C 木曾御嶽神社関係		44
D 善光寺略縁起類（冊子類）		45
E 善光寺信仰関係冊子類（その他）		57
F 善光寺平関係冊子類		59
G 善光寺如来、お守り、その他		61
H 善光寺関係摺物		67

一、本目録は、佐々木茂美氏よりご寄贈いただいた資料群の図版目録である。

一、本目録では資料群をAからHまでの八項目に分類し、それぞれ写真・点数・製作年代・法量（単位センチメートル）を掲載した。なお、資料群の分類・年代等は当館受贈時に佐々木茂美氏よりいただいた寄贈目録をもとにした。

一、本巻冒頭に寄贈者の佐々木茂美氏より玉稿を賜った。

一、本巻掲載の写真は高久良一氏の撮影である。

阿弥陀三尊像（善光寺式）

資料番号A-1

絹本着色 縦六〇・五cm、横三二・〇cm 室町時代

善光寺の本尊、阿弥陀三尊像の姿を描いたもの。手前には月蓋長者と夫人の姿が配される。

善光寺の阿弥陀三尊は、三国伝来の霊像として信仰を集め、秘仏化が始まるとされる鎌倉時代以降、模刻像が盛んに造られた。現在は六百件を超える作例が全国で確認されている。大半が彫像だが、一部画像も知られる。

画像としては、東京・根津美術館蔵《善光寺如来縁起絵》三幅中の中幅に、善光寺伽藍と一光三尊仏が描かれる他、アメリカ・フリーア美術館本が鎌倉時代に遡る作例として知られる。それ以外はやや時代が下がり、南北朝時代の滋賀・本覚寺本、室町時代の愛知・徳川美術館本、長野・善光寺大勧進本などが知られる。

これらの画像の特徴は、一光三尊仏の手前に月蓋長者と夫人の姿が配されることである。本図にも夫妻の姿が描かれ、月蓋は両手で笏を持ち、夫人は両手で華

籠を捧げ持つ。月蓋は宝冠を被り、夫人は天竺の服制である璫璫衣を着ける。そもそも善光寺如来は、東インドの毘舍離城に住む月蓋長者が、その娘である如是姫の病氣平癒を祈願し、その願いに応えて現れた生身の仏として信仰を集めた。画像では月蓋長者夫妻を配することで、善光寺如来縁起の根本を視覚的に示しているのである。

本図に描かれた阿弥陀如来三尊像は、中尊阿弥陀如来が右手を施無畏印、左手を刀印に結び、袈裟は胸を開けた通肩に着ける。左右の観音・勢至菩薩は、両手の掌を胸前で上下に重ねる梵篋印を結び、筒型の宝冠を被る。中尊、脇侍ともに肉身は金色に塗られ、着衣が種々の截金文様で飾られたいわゆる皆金色に表され、通例の善光寺三尊像の姿である。中尊の光背からは唐草が伸び、化仏が配される。光背の周囲には雲気がたちこめ、こうした表現も他の彫像作や画像作例と共通する。

細かい文様まで丁寧に描き込まれ、脇侍の眉下に細く金線が引かれた立体感の表出や、中尊の光背にからまる唐草文の優美な曲線など、見どころは多い。三尊の表情にやや硬さが見られるところから中世も後半の作であると感じさせるが、中世に遡る画像が少ない

中、注目される作例である。

保存状態は、全体的に傷みや剥落が激しいのが残念であるが、図様が不明瞭になるほどではない。なお、本図は全体的に画面が切り詰められていると考えられる。月蓋長者夫妻は上半身のみで、下半分が不自然に欠けている。夫人は背中也半分欠けている。如来部分を見ても、光背の七化仏のうち上方の三体が欠けている。現状では一光三尊が大きくクローズアップされたように配置されているが、本来は画面全体が上下左右に一回り大きかったと想像される。

最後に、三尊の法量を測ってみると、画像の最古例として知られる根津美術館本と一致している点が注目される。中尊阿弥陀如来は像高三六・〇cm、脇侍各像高二七・〇cmで、根津美術館本の約三五cm、約二五cmと共通しているといえる。善光寺三尊は『善光寺縁起』に阿弥陀如来は一尺半（約四五cm）、脇侍が一尺（約三〇cm）と明記され、流布する模刻像はこの大きさをほぼ再現している。それからいうと根津本、本図ともに一回り小さいわけだが、画像間で法量が共通している点に、善光寺三尊を模す際の規範が活かしているといふことはできないだろうか。（竹下多美）

1、二〇〇九年の調査によると、六一五件が報告されている。古幡昇子「善光寺式阿弥陀および脇侍像現存作例一覧概要」（『佛教藝術』三〇七号、毎日新聞社、二〇〇九年十一月。）

2、内田啓一「根津美術館藏善光寺如来縁起絵」（『佛教藝術』三〇七号、毎日新聞社、二〇〇九年十二月。）